

第4章 丘珠縄文遺跡の概要

1 調査の経緯

サッポロさとらんどでは、これまでの調査で3カ所の遺跡が見つかっています。一つ目は、現在の「ミルクの郷」(サツラク農業協同組合牛乳工場)付近から見つかった擦文文化(約1000年前)と続縄文文化(約2000年前)の遺跡(H317遺跡)です。この遺跡からは、工場の建設に先立って平成4・5年に実施した発掘調査で、擦文文化の竪穴住居跡12軒や、続縄文文化の炉跡93カ所が発見され、当時の生活の様子が明らかになっています。遺跡は現地に残っていませんが、発掘調査で見つかった土器や石器は埋蔵文化財センターに収蔵し、その一部はさとらんどセンターに展示しています。なお、発掘調査の記録は報告書(『H317遺跡』札幌市文化財調査報告書46)としてまとめており、札幌市中央図書館で閲覧することができます。

二つ目は、現在の「風のはらっぱ」の南側から見つかった縄文晩期(約2300年前)の遺跡(H508遺跡:丘珠縄文遺跡)です。この遺跡からは、平成4・5年に実施した遺跡の有無を調べる予備的な調査(試掘調査)で、広い範囲から土器や石器が見つかっており、市内でも有数の広がりを持つ縄文文化の遺跡であることが明らかになっています。H508遺跡は、上述したとおり、現在、盛土されて地下に保存されています。

三つ目は、現在の農業支援センターの^{ほじょう}圃場付近から見つかった続縄文文化(約2000年前)の小規模な遺跡(H509遺跡)で、この遺跡も地下に現状のまま保存されています。

この3カ所の遺跡のうち、市内でも有数の広がりを持つ縄文文化の遺跡である丘珠縄文遺跡を活用して、遺跡公園を整備する事業が、「第3次札幌新まちづくり計画」に位置づけられ、平成25・26年度には、遺跡公園の整備に向けて、丘珠縄文遺跡の確認調査を実施しています。

2 確認調査の方針と方法

(1) 調査方針

丘珠縄文遺跡を活用した遺跡公園の整備に向けて、遺跡の具体的な内容を把握す



第3図 「サッポロさとらんど」と遺跡の位置

S≒1/8000

第2表 さとらんだの遺跡の沿革

| 年度 | 項目 | 概要 |
|------------------------|-------------------------|--|
| 昭和49年3月 | H317 遺跡登載 | H317 遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡台帳に登載される。 |
| 平成4年5月 | 「(仮称)札幌里づくり事業基本計画」策定 | 農業公園構想が具体化し、都市と農業の共存、人と自然とのふれあいをテーマとした事業計画が策定される。 |
| 平成4年6～7月 | 試掘調査 (さとらんどⅠ期工事範囲) | 試掘調査の結果、H317 遺跡の範囲から擦文時代の遺構・遺物が発見される。 |
| 平成4年8～11月 平成5年5～10月 | H317 遺跡発掘調査 | 発掘調査の結果、擦文時代の竪穴住居跡12軒、続縄文時代の炉跡93カ所などが検出される。 |
| 平成5年7月 | 試掘調査 (現H508 遺跡周囲) | 現在の「風のはらっぱ」の南側付近(C・D地区：現H508 遺跡)から縄文時代晩期の土器・石器が発見され、約25,000㎡の範囲に縄文時代晩期の遺跡が広がることが確認される。 |
| 平成5年 | H317 遺跡 C・D地区盛土保存 | H317 遺跡C・D地区(現H508 遺跡)が、盛土により現状保存される。 |
| 平成6～7年 | 試掘調査 (さとらんどⅡ期工事範囲) | 現在の農業支援センター圃場付近で、続縄文時代の遺物が発見され、盛土により現状保存される(現H509 遺跡)。 |
| 平成7年 | 「サッポロさとらんど」(第Ⅰ期エリア)オープン | 「サッポロさとらんど」第Ⅰ期エリアの供用が開始される。 |
| 平成12年9月 | H508 遺跡、H509 遺跡登載 | H317 遺跡C・D地区が、H317 遺跡とは別の遺跡であるH508 遺跡として遺跡台帳に登載される。H509 遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡台帳に登載される。 |
| 平成16年 | 「サッポロさとらんど」(第Ⅱ期エリア)オープン | 「サッポロさとらんど」第Ⅱ期エリアの供用が開始される。 |

るための確認調査は、遺跡が沖積平野の低地部に所在することを踏まえ、次の方針のもと実施しました。

- ・遺跡全体を対象にトレンチ調査^{※16}を行い、地層の連続性を把握し、当時の地形や遺物包含層^{ほうがんそう}^{※17}の状態を確認します。
- ・遺構の有無を確認し、その内容・分布状況の把握に努め、確認した一部の遺構については、保存を前提とした部分的な調査を行い、動植物遺存体の回収等を通して、遺構の性格を把握します。

※16) トレンチ (trench) とは堀や溝のことで、考古学の発掘調査では、細長い溝を掘って行う調査を「トレンチ調査」と呼びます。

※17) 土器や石器等の遺物が出土する地層。

(2) 調査方法

確認調査は、平成25年6月24日～9月19日、平成26年6月23日～10月10日に実施しました。このうち、平成25年7月24日～8月11日、平成26年7月23日～8月10日に、市民ボランティアの参加のもと、集中的に作業を進めています。

確認調査では、まず、丘珠縄文遺跡の試掘調査やH317遺跡の発掘調査の成果等から想定される埋没河川^{※18}の流路を踏まえ、トレンチ調査により微地形を把握する目的で、遺跡範囲の南辺をY軸方向の基線とするX軸とY軸とからなる発掘区を設定しました。X軸とY軸との関係は数学系座標と同様であり、発掘区方眼は10m×10mを基本単位とします^{※19}。

次に、平成25年度は、発掘区方眼のX軸10区の西壁沿いに4カ所、X軸14区の西壁沿いに2カ所、Y軸09区の北壁沿いに4カ所、合計10カ所で幅2～3m程の調査区(調査区001～010)を設定し、さらに、発掘区方眼の軸線に沿って、調査区内に幅1mのトレンチを設定しました。平成26年度は、発掘区方眼のX軸06区の西壁沿いに1箇所、X軸18区の西壁沿いに1箇所、合計2カ所で幅3m程の調査区(調査区011・012)を設定し、発掘区方眼の軸線に沿って、調査区内に幅1mのトレンチを設定しました。また、11-08区(X軸11区、Y軸08区)を中心に方形の調査区(調査区013)を設定し、11-08区の西壁及び北壁に沿って幅3～4m程のL字状のトレンチを設定しました。

平成25・26年度ともに、調査区の盛土を重機で除去した後、人力で自然堆積層の上面を精査し、トレンチを掘削しました。トレンチ掘削後、土層堆積状況の観察

※18) 土砂が堆積して埋まってしまった河川の跡。

※19) 発掘調査では、一般的に、遺跡全体に方眼紙をかぶせるように格子目の地割りを行って、発掘区を設定します。発掘区のひとつひとつの区画(発掘区方眼)は、数学のグラフと同じように横軸(X軸)の番号と縦軸(Y軸)の番号の組み合わせで呼称します。

結果に基づき、出土した遺物は、層毎にトータルステーション^{※20}を用いて座標点を記録して取り上げました。検出した遺構は、炉跡(HE^{※21})、焼土粒集中(DB^{※22})、炭化物集中(DC^{※23})に分け、トータルステーションを用いて平面外形を記録後、一部の遺構について、部分的な土壌のサンプリングを行いました。炉跡の一部については、火床^{※24}上に堆積する土壌をサンプリングし、火床を検出した段階で調査を終了しています。

なお、遺構・遺物の分布が疎な範囲については、包含層を掘削し、下位の土層の確認を行いました。遺構・遺物の分布が密な範囲については、複数枚の包含層のうち、上部の包含層のみを調査して作業を終了しています。

※20) 距離と角度を同時に計測することができる測量機械で、一般的に狭い範囲での高精度な測量に利用されます。

※21) 「HE」は、炉跡の英語表記である「Hearth」の略語です。

※22) 「DB」は、焼土粒集中の英語表記である「Dense Burned Soils」の略語です。

※23) 「DC」は、炭化物集中の英語表記である「Dense Charcoal」の略語です。

※24) 「ひどこ」ないしは「かしょう」と読みます。火を焚いて地面が赤く焼けたところ。赤く焼けた土を「焼土」(しょうど)と呼びます。

3 遺跡の概要

(1) 地層と地形

丘珠縄文遺跡を構成する土壌は、主に河川堆積物で、粘土、粘土質シルト、砂質シルト、細砂から構成されています。これらの自然堆積層のうち、確認調査では、連続して堆積する5枚の層から、土器や石器など縄文晩期の遺物が出土しました。また、5枚の包含層のうち、下位の3枚の包含層で、炉跡(HE)、焼土粒集中(DB)、炭化物集中(DC)を検出しました。

トレンチの土層断面を記録し、13カ所の調査区において縄文晩期の包含層の標高を比較した結果、調査区001、002、003、004、005(北端)、009、013が他の調査区よりも数十cm高いことが判明しました。また、調査区005及び調査区012の南端における細砂の堆積状況から、縄文晩期頃の河川の流路は、想定されたとおり、遺跡の南側に存在した可能性が高いことがわかりました。

したがって、縄文晩期には、調査区001、002、003、004、005(北端)、009、013を囲った範囲を中心に微高地が広がっていたものと考えられ、この微高地は、調査区の南側を流れていたと推測される当時の河川により形成された自然堤防の高まりに相当するものと考えられます。

(2) 遺構と遺物

遺構は、3枚の包含層から、炉跡（HE）26カ所、焼土粒集中（DB）8カ所、炭化物集中（DC）4カ所を検出しました。

遺物は、5枚の包含層から、座標点で合計6,800点程が出土しました。多量の土器や石器とともに、装身具であるコハク（琥珀）製の平玉も数点見つっています。

これらの遺構と遺物は、調査区001、002、003、004、005、013から集中的に検出されており、その分布範囲は、上述した自然堤防の高まりと一致しています。

また、遺構から採取した土壌サンプルについて、フローテーション法^{※25}を用い選別した結果、現在までの作業で、黒曜石等の石器碎片やクルミ属内果皮片^{※26}といった微細遺物が比較的多く含まれ、その他にも、サケ科を主体とした魚骨片やチョウザメ科の鱗板片^{※27}、植物の種子等が含まれていることが判明しています。

なお、植物の種子としては、市内の縄文文化の遺跡ではじめてヒエ属の種子が発見されました。

※25) 浮遊選別法。土壌を水で溶き、比重の軽い遺物を浮遊させて回収する方法。

※26) 内果皮とは、果実の内部の種子を直接包んでいる部分のこと。クルミの硬い殻の部分。

※27) 鱗板とは、チョウザメ科の体の表面にみられる硬い鱗のこと。「硬鱗」（こうりん）とも呼びます。

(3) 遺跡の概要

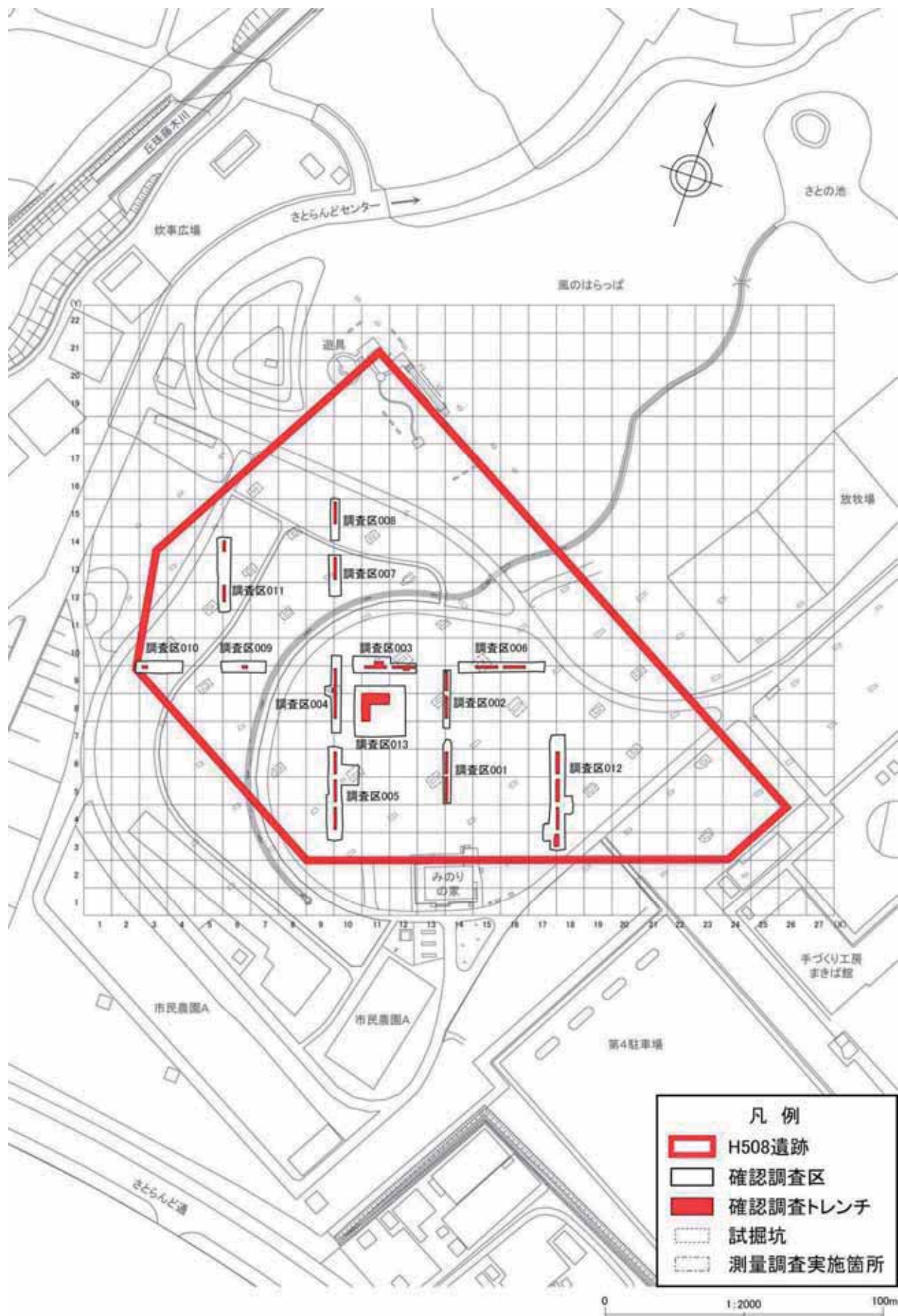
平成25・26年度の確認調査の結果、丘珠縄文遺跡は、少なくとも5枚の包含層からなる縄文晩期の多層遺跡であり、遺跡内南半の中央付近に広がる自然堤防と考えられる地形の高まりに、炉跡等の遺構や土器・石器等の遺物が集中して分布していることがわかりました。

炉跡周囲の土壌には、石器の碎片、クルミ属内果皮片、サケ科を主体とした魚骨片やチョウザメ科の鱗板片、植物の種子等が含まれており、炉を中心とした生産活動の一端を確認することができました。市内の縄文文化の遺跡ではじめて見つかったヒエ属の種子は、近接するH317遺跡の続縄文文化初頭のヒエ属種子と合わせて、ヒエ属の栽培化や利用方法を検討する上で、たいへん貴重な資料と言えます。

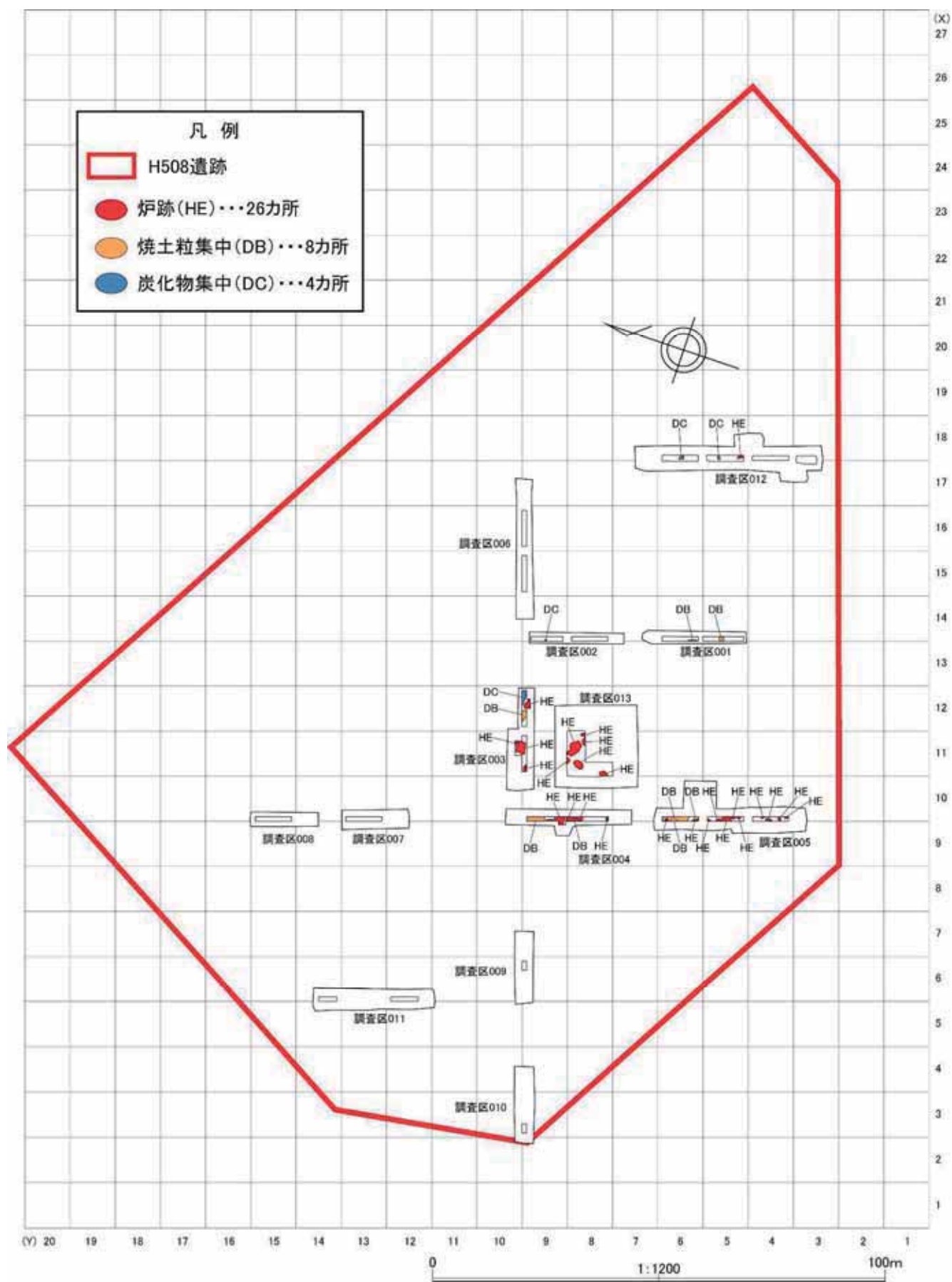
包含層が累積している状態から、丘珠縄文遺跡は、季節的に集中する生業活動に伴い形成された遺跡と推測されます。

なお、現在も整理作業を進めているため、以上の概要は、中間報告的な位置付けとなります。最終的には、平成27年度に、放射性炭素年代測定^{※28}の結果などを含めて、詳細な内容を報告する予定です。

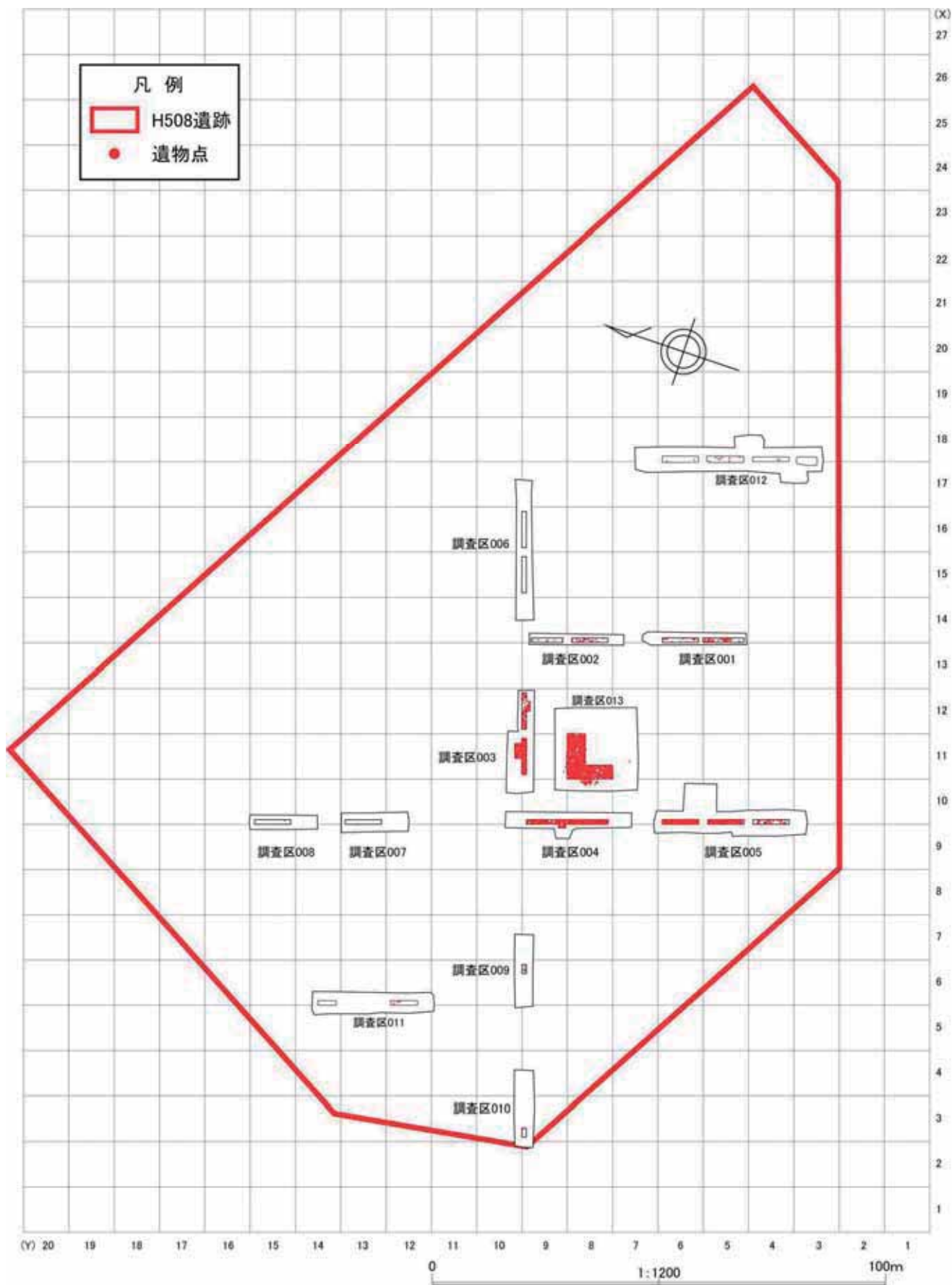
※28) 最も普及している理化学的な年代測定法の一つで、自然界に存在する炭素同位体「炭素14」（¹⁴C）が、放射線を出して崩壊し「窒素14」（¹⁴N）に変化する半減期を利用して年代を測定する方法。



第4図 確認調査区配置



第5図 遺構配置



第6図 遺物分布



写真図版1 クルミ属内果皮片（丘珠縄文遺跡焼土粒集中から回収）



写真図版2 ヒエ属種子（丘珠縄文遺跡炉跡から回収）



調査区004遺物出土状況（南から）



調査区005遺物出土状況（北から）



調査区003炉跡調査状況（北から）



調査区004炉跡調査状況（東から）



調査区004一括土器出土状況（西から）



調査区003一括土器出土状況（西から）

写真図版3 確認調査実施状況



調査区012炉跡・遺物検出状況（北から）



調査区012炉跡火床検出状況（西から）



調査区013遺物検出状況（南から）



調査区013炉跡検出状況（北から）



調査区013土器出土状況（北から）



調査区013コハク製平玉出土状況（西から）

写真図版4 確認調査実施状況